

白門祭の歴史にふれた

文&写真

学生記者

内藤伊音 (商学部3年)

初めてホームカミングデー(HCD)に参加した—といっても、来場者として訪れたわけではない。毎年秋に開催される卒業生の祭典・HCDで、「白門祭実行委員会」(白実委)の一員として、白門祭を広報・宣伝するためだ。

白実委がHCDでこうした活動をするのは初めてだという。卒業生の集まりに注目したのは理由があった。記念すべき「第50回白門祭記念モザイクアート」製作のため、多士済々の中大OB・OG諸氏から過去の白門祭写真を提供していただきたい、その告知の場がほしかった。

祭典を運営する中央大学学会にその許可願いを出すと、すぐに快諾をいただいた。「かねてから現役学生との関わりも深めたいと考えていました」との返答。それどころか、当初はビラ配りのみを考えていたのに、HCDパンフレット裏表紙(カラー)に白門祭の告知を大きく載せてもらえるまでに発展した。

白実委は俄然^{がぜん}気合を入れた活動になった。当日、スタッフジャンパーを着て、ビラ配りをしていると、行き交う卒業生の話がよく耳に入った。

「私たちが学生の頃はモノレールが開業してなくてね」(開通は2000年1月)、「ペデ下のここ(ペ



ペデ下で卒業生に告知ビラを渡す白実委メンバー

ンチ)で、みんなよく集まって話をしたものです」。初対面の我々に思い出話を披露してくれる。みなさん、とってもいい笑顔だった。

子ども連れの家族から、ご年配の方まで大勢の人たちが母校・中央大学での1日を楽しんでいた。母校が今でも大切な思い出の場所として、卒業生の心にしっかり息づいていることがよく感じられた。

白門祭についても予想以上にたくさんの人に興味を持っていただいた。モザイクアートの説明後、「でき上がるのが楽しみだ」と写真提供を約束してくれる人がいた。別の人には「私が現役だった頃はねえ、白門祭には飲食模擬店なんてなくて」と当時の様子を教えてもらっ

た。想像もできなかった白門祭の歴史が分かる貴重な機会となった。

第50回白門祭を迎えた2016年をきっかけに、現役学生と卒業生との関わりがより深くなってほしいと感じた一日だった。



告知ビラを作り、気合が入る白実委メンバー